



雜

八

案

嬰婦(女)養



(內發省詳可)
嬰婦(女)養

廣 告 數 件
近 極 門 左 衛 門 作

義 太 夫 雜 誌

第 八 號

明 治 廿 六 年
九 月 三 十 日

發 兌

論 說

義 太 夫 謠 曲 の 壽 夭

(承 前)

然らば如何なる改良を加へ幾許の弊害を除去して可あるやと云ふ問お就てハ大ひに我輩も斯道の熟達家と計り研究するの所あらんとす然りと雖も改良の事は至難の業なり故に急速に施し難し但し弊害を除くの點に至ては今の技曲家が爰又一種の勇氣を鼓舞し又更に克己の情を懷きて文學音樂家と計り行くときは甚た容易の事なるべし假例は曲中の藝細を省き愁歎啼叫の語調を減するが如き又節の中ニ產字即ち韻却の調和ある様も曲本の假名を更むるが如きは蓋し其第一着なるべし次に風味もあく雅致もなく又愉快にもあらざる世話物は片端から斥除するに如す或は寧ろ茶毘一片の煙となすも敢て惜む足らざるべし彼の「夏祭」「鰻谷」の如きは先じて此革命の斬首臺に上るべし乍去作柄に於ては餘り感賞すべからず又風味も乏しきものと雖も鎌倉以後幕府失政の情況をして人情風俗の參考とし探るべき者等は之を助け置くも又裨益する所あるべし其取捨の點よ就ては汎く嗜好家技術家文學家等の輿論を仰くべし義太夫謠曲の健康を維持し壽命長く東洋に鵬翔せしめんことを欲せは今や深く此に注意すべきの秋なり。

(未完)

漫言

義太夫は語るべし義太夫よ
語らるゝ勿れ

骨皮道人

義太夫雑誌第八號發刊の期至れり。道人また一筆染して何をかなりしざるを得ず。ハテどんな事を。ハテ
と云ふ事を。例に依て先づ古机を擔ぎ出し。禿筆と歛硯とを恭しく右手に載て。考一考思一思。恰も野
鳩の豆鉄鉋を食ひしが如く。眼玉バチクリたる事殆ど一時間半ばかり。而して漸く筆を執りスラ／＼に
はあらず。ギツクリ／＼と書初めたるは抑も如何なる事ぞ。イヤ相變らず讎敵を求むるの憎まれ口。彼の阿
房多羅坊主の前置にはあらねど。お氣に障らは眞平御免下さるべし。

扱義太夫を勉強するに二種あり。即ち之を習ふて立派に何の何太夫と名乗出で。以て一生涯鼻の下を養ふの
財産は供せんと欲する者ぞ。一は之を習ふもホンの自分一己の樂しみにして。敢て鼻の下は關係せざる者
との別即ち是なり。ソコで其の之を以て營業にせんとする者は暫く措て云はず。只彼の自分一己の樂しみに
して迂鳴る者に就ては。往々厄介な人物の飛出すには困るあり。

夫れ音曲を習ふに於ては義太夫なり。常盤津なり。長唄なり清元なり。各々の好む所に隨ふ譯なれば。其熱
心さ加減も亦た同じかるべき筈なるよ。他の常盤津清元の如きは左に非ずして。只義太夫を迂鳴る者のみに
限つて。或は天狗の嘲笑を受け。或は狂人と冷評さるゝ者の多きは抑々何故ぞや思ふに此等の人々は斯道

過るより生ずるの結果なるべしとは云へ。元々是を以て天下又名を轟かす。後世に於ては、其れを

限つて。或は天狗の嘲笑を受け。或は狂人も冷評さるゝ者の多きは抑々何故ぞや思ふに此等の人々其

過るより生ずるの結果なるべしとは云へ。元々はを以て天下を轟かし後世にまで譽を遺さうと云ふ目的ではなし。只僅かゝ器陶晴しの爲め。ろりや聞へませぬ傳兵衛さんとか。或は。相撲取を夫にもち江戸長崎や國々へ位なことを迂鳴るゝ過ぎる以上は。好は好みて宜しと雖も。其好より進んで道樂となり。道樂變じて熱心逆上となり。其又熱心逆上を通り越して天狗狂人とも宜かりさうなものと思はるゝなり。尤も好ころ物の上手と云へは。天狗狂人とも評せらるゝ人は必ず迂鳴り方も旨いかと云ふに。イヤと云うして此等の人は至つては。好は好だが横好と云ふ質なるが故に。自分の了簡では越路に茶を汲せ。綾瀬に足を揉ませる位な氣組で居れど。他人の目から見。他人の耳から聞くときは。イヤハヤ泣のやら。笑ふのやら。語るのやら。小言を云ふのやら。サツパリ譯のわからざる仕誼なり。併し夫も自分だけの横好よして。其飛つ尻を他よさへ及ぼさなければ。何も彼は云ふ處に無しと雖も。餘り義太夫熱に浮さるゝが爲に。肝心な家業はお留守になつて。米櫃には時ぢらぬ雷聲を發し。財布はいつでも腹を下して居る。お負は親父の小言は馬耳東風。間が宜かつたら女房を賣て。朱檀作りの見臺でも買度と云ふに至つては。随分大テコ摺の厄介者と云はざるを得ず。故に道人は斯様なる狂人先生に向つて云はんとす。義太夫は語るべし義太夫に語るゝ勿れど。』

之を思ひ之を思ひ又重ねて之を思ひ之を思ふて通ぜざれば鬼神

將よ之を通ぜんとす鬼神の力に非ず精氣の極めあり

管

仲

寄書

院本の話 (承前)

桃の家鶴彦

延享四年十一月の出版より竹田出雲三好松洛並木川柳等の作に係る義經千本櫻の高作なることは今更ふ喋々を要せざるに非らざるなり其三段目の切鯨屋の場作意に就き聊余が思合せることころあれは三段目の骨子に吉野下市に釣瓶鯨屋の彌左衛門と稱する者を設け其者は元小松重盛唐土硫黄山へ祠堂金を贈らんとせし時其金三千兩を横奪したる船頭にして一命を斷るべきを仁心深き重盛公に助けられ其後吉野下市に來り鯨見世を出して世を安く送りはすれど其長男權太の無頼みて盜癖あるは乃ち舊惡の應報なりと懺悔し平素重盛に助命の恩を謝せんと心掛け居る折柄惟盛に熊野浦よて出合ひ連れ歸りて家に隠し置くといふ趣向なるが其は例の空中樓閣の脚色には非らず彌左衛門が惟盛の彌助に對

せる詞に

君の親御小松の内府重盛公の御恩を請たる某何とぞ御子惟盛卿の御行衛をと思ふ折柄熊野浦にて出合御月代をすゝめ此家へ御供申たれ共人目を憚り下部の奉公餘りと申せぬ勿体な女房斗に子細を語り今霄祝言と申も心は娘を御宮仕へ彌助々々と賤しき我名をお譲り申たるも彌助くるといふ文字の縁義人はしらじと存せしふ今日鎌倉より梶原平藏景時來つて惟盛をかまくまひ有とのつ引させぬ詮議云々

とありては元來惟盛の事跡平家物語盛衰記等にも平家都落の後一の谷より四國九州へとて航せし時惟盛は高野詣とて紀州に行れしより終り歸りたまはず或は那智の瀧に沈み玉ひしなど書き載せあるは皆跡をくらますの筆頭に出たるものならんか其の實は紀の國高野と熊野との間に湯川といへる地に小松彌助といへる郷士代

く此邊を知行せるが重盛の御子惟盛末孫にて其地は紀
 州公へも年貢を納めまゐらせず二三百家村の収斂殘ら
 ず小松殿に納むるとて公よりもゆるし置き玉ふよし古
 書よ見ゆ又太田南畝先生一語一言四十七の巻よも其由
 緒書を載せて遠祖維盛元暦元年三月廿八日紀州熊野那
 智之沖にて入水之旨披露仕同國有田郡保田之山林に潜
 居元久元年子六月卒居云々とありて其二十六代目の孫
 小松彌助長盛文化五年辰五月に署名押印せし歴代の名
 等詳かゝ掲けたる系譜あり案ずるに作者は此事跡を利
 用して三段目を作り彌助に因みて彌左衛門てお人物を
 設け字音を通せて彌助くるといふ如きは最巧妙なり
 凡て歴史的の作意と斯る事跡の曖昧なるものを採りて
 材料となすところ適切のことゝは思はるれ又此場合も用
 ひたるいがみの權太てお名稱も作者が隨意の命名にあ
 らず源平時代の大名が蓄へる名馬の名に「いがみ」及
 「權太栗毛」など唱ふるものあるよ思ひ寄て悪人にささ

はしき様いがみの權太とは號けしありと鈴木桃柳先生
 の談なり作者が斯る瑣事よも心を着けて苟もせざるは
 感ずるに餘りあり。

古 曲

上るり十二段 (承前)

四きのちやう

小 野 通
九だ んめ

ろのゝち御ろうしは上るり御せんひとま所へしのは
 せ玉へてみたまへは西方のしやうしよ四きをろかゝれ
 たりまつひかしののしやうじよかいたるはゑははるの
 ていかどうちみへてきさらきすへやよひはしめのころ
 成にみねのしら雪むらきへてたにのさわらひもへいづ
 れは松のゑたにはくしやくほうわうがさへづりてり
 にてりぬるてりましこひわやこからや四十から數の小
 鳥がすをくいてかなたこなたへまへあろびしろのおせ
 いをかゝれたるは誠にはるかど見へにけるみなみのし

やうじにかいたるゑはなつのていかど打見へて卯月すへさみだれはしめのことあるふのきはをかすはあやめ草よふかをかたるはほどゝぎすなつかしさにろなたのうらをまがむれはしづのめが田このもすそを引みだしすげのをかさをかたむけてさまへ取ころやさしけれ日たにくるればわがやにかへりやどのうつみかきたてゝのきは又つたへてたつけふりにへどかたふくろのしたよかうろぎはたをりきりくす松むしすゝむしくつはむしろけになかぬはたるゝむしせみのなくこゑ木すへくひにひゞきわたりしそのふせいをかゝれたるは誠になつかど見へて有にしのしやうじをみてあれ秋のていかど打みへてねぎがうわばよろよふくかせ木のしたばいむすぶ露九月下じゆんにもみぢばの所くちりゆくふせいをかゝれたるは誠又秋のけしきなりきたのしやうじにかいたるゑはふゆのていかど打見へてとうさんちかく里までもあらしてがらしはけしくてのき

の玉水てほりけりつかわぬおしの一つがひはをはこほりよとちられてたゝさるそのふせいは日ほんめいよのゑかきの上手がこじう六せうの筆をもつてしゆをもおしませうかいたりしを物によくくたどおれはみやこにては一てう殿や二てうどのこのゑくわんはくくわさんのおん六はらどの、御所とか申とも是にはいかてまざるべき。』

すかたみのたん

十たんめ

さるほどお御ろうしは上るり御せんのみくらひやうふにたゝすみたまひて見たまへは上るり御せんはよひのくわけんのさたはてゝひすいのかんさしまくらひようふまやりかけぢんのまくらにかたふきてせんでもしらてやどられけるうのすかたをものにゆくくたどおればむかしならはたうのやうきひわがてうにてはくらまのひしやもんいもうとに吉でう天女がきりつほはゝきとろとれりひめのろのすかたいつみしきふにてしきふ

にむらさきしきふにそめどの院おほろ月よのなしいしのかみ女三の宮のたちすがた玉くらに玉ものまへ小野の
 小町のわかさかりふんこのくになるまゝの長じやのひ
 どりひめと申ども是罪いかでまさるべきすかたを申
 せばはるのはなかたちを申せば秋の月しつは十のゆ
 ひまでもるりをのべたることくなりふやうのおめもあ
 さやかにたにくわのくちびるいつくしくゑめるはくき
 にあいをおあしけんろのおどかい玉に似てみえんのま
 ゆすみほろやかよせたいかたていたにかうるりのす
 みをそりさつどあかひてみるごとく三十二うのしま
 わうこんは十しゆかうをつらねつゝひわのわうすにこ
 どのつちまなの上手にかなのつちよみけるううしはと
 れくそきんまんよういせものかたりしゝろうちく
 もきやうたらう百四てうのむしつくし八十四てうの草
 つくしあふきなかしすゝりわりさなからゑにかあみけ
 るちしまふみまてもあそはすていかと打みへてゆんで

めてにそ引ちらしおき玉おかの御ろうししの心の内かん
 せぬものころなかりけり。』

文 園

忠臣蔵狂句 (二) 骨皮道人

是と文政年中四代目川柳翁の頃斯道も遊お
 八々の催しよ係る彼の忠臣蔵の中丸本に云
 ふ天川屋義兵衛法號法正院日可居士の百年
 忌を営みし時の狂句にして餘り世間に此類
 を見ざるのみならず忠臣蔵と云へは義木夫
 道よ於ても亦た其縁故甚だ深ければ其集句
 中に就き殊も妙味を覺ゆる句のみを抜萃し
 て諸君の御一覽に供する事とはなしぬ。

忠義の龜鑑はつたんはつるかをか 松 鱸
 豫讓野暮女郎買でも忠は出来 結 長
 四十七外にんの字の天川屋 小 丸

お年のうへなと、お軽も不孝者
 大石のひすこ小石と小浪云ひ
 天野と大野と一畫で大違ひ
 かくす天文知る地知る七段目
 いろはにほへどちりぬるは泉岳寺
 みゆら取りみいらに成らぬ七段目
 鬼門の仇討よるこひは安藝の方
 忠々と云ふべし殿の血をあめ
 椎茸がかはたけになる一力屋
 一幕で家名の賣れる天川屋
 桃の井の方はいびつで丸くすみ
 配分よ小野が勝手の九太を巻
 死ぬはまた早勘平と老母あき
 其初めいろから起る假名手本
 家筋も長持のする天川屋
 向ふから小提灯勝負附

樂笑 貞龜 巨眼 柳泉 元住 笑巴 佃鳥 花鳥 菅子 辻木 杜蝶 八竹 鈴吉 定丸 木賀 風松

大きな石で四位の身を打つぶし
 主は少將鷺坂は五位だらう
 思々の引て来るのを夜明ごろ
 勘平の追善供養日一兩
 兩家老大の字のつく忠不忠
 和のほまれ四十七劔人が出来
 親切の深さは知れず天川屋
 父は子の爲にとりて来る
 由良鬼は胸に鐵棒持て居る
 去ものゝ疎からず義を今にほめ
 勘平のしの字の札を先へどり
 大鵬の心の由良が千鳥あし
 椽の下老眼で猶はかぞらす
 秦のうるしに四十七人かぶれ
 大變さ鮪を押へて網に入れ
 和漢の忠臣炭をのみ炭で討ち

柳葉 柳亭 可樂 小丸 小丸 芋洗 辻木 菅子 麴丸 里鳥 佃風 扇笑 樂亭 柳亭 貞龜 一枝 升丸

海音戯文評

情 農 子

紀海音まきののりおんか作さくに青梅撰つばきりさかり食盛じきもりといふありちちよ半兵衛はんべゑの元祖もとなるべしおちよ半兵衛はんべゑの名なを思おもひしよやお長おちやうはんべゑ半兵衛はんべゑとありて板行ばんこうの本ほんあうめ木ぎしたる様やう見ゆ故ゆへに末すえの方ほうとてろくにおちよとありてお長ちやうと直ちかさぬ所ところも間々まゝ見み侍はべる。

第二段目だいにだんめに半平はんぺいが濱松はまごつへ行ゆたりし留守るすよ女房にやうぼお長ちやうしんを姑あはかさりしをお長ちやうがおばはんべゑ半兵衛はんべゑも同意どういと心得こころは途中ちゆうよて半平はんぺいにあひうらむことば妙みやうなり也。

しうとめこのさりなふみ。とりにくひ御ごきげんよ。しんぼうするは何なにゆへかほ。男おとこの顔かほをたのしみふ。くらす女房にやうぼうも口出くちだして。ひいきころあるまいけれ影かげひあたになるほどの。きぼねを折おつてやられても。さのみ人ひとはしかるまひ。いふではないがかはいろよ。物もの

も見みんぞぬいまする。書か出し一つする程ほどの目めは。親おや達たちはあけておく。うみつひぎあら人ひとあいあら。きりやうは。こゝろたの覺おぼており。ちつどのおちめのはであれど。わかい時は二度にどはない。さのみむりにもあらぬ筈はず。(下畧)

手てを書か事をかきだし一つとは老婆らうばの聲こゑ色いろ奇妙きみょうく末すえに七郎兵衛しちろうべゑがことば見合みあすべし。

きりやうはいはぬ處ところも又妙またみやうなり。

此こはでの字あじ始終しじゆうに照應しやうおうあり此所このところよ島原しまはらのかけおちものにまぎれて追手おつてのかゝる所ところありこれも此このはでの字あじに眼めをつくべし此この次に姑しよめのまとばを書かぬき置見合おきみあすべし。

同所どうしよお長ちやうが詞ことば。

此世このよの縁えんはうすくとも。未み來らいとあがくろふべしと。たのしみにした我身わがみをは。むごと斗半平はかりはんぺいを。じつと見みやりし目の内うちよ。恨うらみと戀こひの二瀬川ふたせがわ。みちくるしほを涙なみだなる。

深情妙語多言するに及ばず妙々。

(未完)

心なき身にもあはれは知られけり

鴨たつ澤の秋のゆふをれ

西行

與竹本綾之助

木郷一書生

既に斬新の處なく文亦小學校落第的のもの貴紙の名篇玉作中に刺するへ甚た恐多き事なれ共御添削の上掲載の榮を賜は幸甚

本誌上に散見する嬢の藝評は毀譽相半すと雖も少しく鯁骨ある評言は概して不評と云とざるべからず僕は日

本橋住人君の所謂愛嬢家の一人なるも青山の將軍堅胃

堂の辨護を嬢に試むるの勇氣みどし泣かんと欲すれば

不可なり哭すれば所爲婦人近し於是乎嬢に一言を寄

するの場合にまで立至れり嬢よ僕も今日迄斯く信せり

嬢の音色は一種の秀逸之を天性に得るものと然るに聲

の婉なるは之を新内清元の節も求めよとの評言に全の

戲謔にもあらざるべし嬢よ僕は今日まで斯く信せり嬢

の妙技は一種の調節に在りと然るに其錯雜ある決して

旨きも非ずその評亦萬更の惡口にもあらざるべし音色

調節道も益なしとせむか餘す所の者夫れ何ぞ容顏の美

聊か恃むあるも是嬢の爲め屑とする所にあらず況や天

爲の麗質も非ざるをや年齒の幼後來鍊磨の餘地あるも

然るを以て人は満足せざるなり見よ一二三三八重子の二

嬢既に先鞭の勢あり住之助小土佐の二嬢亦後に墮若た

るものよあらず此多端ある日月艶聞醜聲を以て甘んず

るの時もあるか嬢よ勉め勉めて現今の位置を有て是切

に希望する處なり將來を慮るの餘り一言以て寄す。

堅胃堂主人を冷評し併せて

七文字屋微笑を戒む 赤坂 藥 買 蕩 夫

蜀魂啼く青山に堅胃堂主人たるものあり竹本越子に如

何なる緣故ありてや嘗て七文字屋微笑が批評欄に於て

饒舌と題し嬢をオチャツピーと評せしとて八千八聲自

ら血を吐まで躍起、嬢を辨護し將た七文字屋を攻撃

す蕩夫はオチャヤツピーなる語の那樣の意味を含蓄し且つ該語の因て來る處を審にせざるを以て主人の云ふ如く其果してお轉婆と誹謗せしや否を知らずと雖も主人

が是等の投書を爲して却て世の胡盧となるを憫み同區内に住するの縁を以て敢て一言の冷評の忠告を試ん。

主人の文意を以て察せば主人は嬢に非常の恩顧を受たるものゝ如く恰も吾か主人の辱めらるゝを知らざる忠臣

の如き看あり主人は嬢を呼に令嬢卿等の語を發し他は單に姐と稱す蕩夫は小面倒たる文字上の理屈を舒るを

欲せざるが故に令嬢或は卿等の義に敢て贅言せずと雖も是等の意を以て推せむ主人は唯々嬢の甘心を買はん

として一向専念鼻息を窺ふものゝ如し又嬢を辨護せんが爲め他をして無理又オチャヤツピーたらしめんとし或

は飛で物は盡しに及ぼし凄しと云ひ可畏と呼びしものを頓珍漢と罵る等若し前述の如く鼻息を窺ふものにあ

らずんば瘋癲、白痴兩者其一は居らん敢て問ふ青山の

相馬公の墓地在地なり何分か其空氣も感染したるもあらざるなきか否か。

主人又自らオチャヤツピーを解釋してオキヤン、ハ子カヘリ、お轉婆の代名詞なりと斷定しながら「斯藝の爲に如何も憤慨せんう」斯藝の爲慎重を缺かれしは暮々

も惜むべし」等の語を爲す然らば主人は藝の巧拙も因て風俗の批評を爲せよとの意も出たるものゝ如し迂も

又甚しと謂ふべし主人よ少しく猛省して斯かる雜誌に業を晒すを止めよ而して猶腹に据へ兼お嬢の爲奮つ

て名譽回復の訴訟を提起せよ。

七文字屋も又大人氣なき人物なり主人の文章に△●◎等の点を附したるは蓋し文体の異様と意味の通せざる

と文字の誤りとに因らん然れども此文を讀むもの主人を除くの外徹頭徹尾法よ体に間然する處なしと認むる

ものあらん何る故らに一句一章に注意を呼ぶの要なし君少しく謹め貴重紙上載すべきの事掲ぐべきの文投

書函に累々たるを君見ずや主人は自ら優男と名命し小學尋常科的の文筆を弄するを相手と爲すの價値なき知るべきのみ君猶蕩夫が忠告を納れず益々罵言を逞ふせば必ぞや主人は驚風を發して奇應丸其効なきの悔あらん斯くても未だ罵筆を舐つて自ら八髻の價値を下さんと欲するや阿々。

罵筆絶

七文字屋微笑

誤解の點を示さんと約せしも無駄と悟りぬ蓋は彼堅胃堂は嘘名を賣らん爲めに吾と喧嘩せんと謀りしなり斯あらは如何に論するも限りあるなし況んや藥賈蕩夫なる人の耳を掩ふて去るおや罵筆よ汝二たび現はるゝ勿れ翁句あり『ものいへと唇さむし秋の風』。

研聲會の初日

下谷 壽

勝

九月二日より神田の錦輝館に開かれたり久々の顔揃な

れはど吾も聽聞に出掛たり

○和佐太夫（語六）の柳局節に申分なきも鶴の脛と云ひたき程長さ足御當人三味線が上手ゆゑ勢ひかく流るゝものならんか左れと語は別ものに頼む。

○新呂太夫（鶴助）の鎌腹善と云ふ聲にはあらねど世話物と來ては旨いもの特に今日の出來は東京はあるか大坂太夫中にも此出來は見ず只疵と思ふは身振が勝ちてオデヤコ芝居じみるなり止すべし。

○津賀太夫（寛三郎）の上下文屋遠慮すぎてか常よりは聞苦し絲は旨いもの。

○綾瀨太夫（豐吉）の宗玄庵室語呂と云ひ調節と云ひ先づ日本一の宗玄彼是云ふだけが野暮るり特に語り前品能く聽集をして自ら靜肅ならしむるは此丈の徳只人氣のなきと恨みなり否東京よりは耳のなきか恥かし。

○識太夫（新兵衛）布引瀧大不出來別人と思ふ程也。

○播磨太夫(紋左衛門)の廊文庫評判よろしかりしも紋

左病氣の爲め中止と惜しかりし。

大切の掛合猿廻し、皆々御苦勞新呂の傳兵衛迷惑らし
きが顔に見わてお氣の毒大造の三味線宜く搔廻しまし
た道理よ外題がお猿だから妄評多罪。

花競得意の演藝

神田 東 紫 朗

竹本小清の太閤記十段目と市川團十郎の由良之助。

竹本小土佐の先代萩御殿と尾上菊五郎の赤垣源藏。

野澤鶴蝶の扇谷熊合上總内と市川左團治の馬場三郎兵衛。

竹本越子の大文字屋の段と市川新藏の梅王丸。

豊竹一二三の寺子屋と片岡我童の伊達綱宗。

竹本綾之助の三勝半七酒屋と市川米藏の油屋多三郎。

竹本東玉の帯屋と市川衆八の人形振のお染。

竹本小政の廊文庫と市川九藏の佐倉宗五郎。

竹本住之助の柳と尾上菊之助の牛若丸。

當世七不苦 仙壽 瓣香 醉史

(一老練) 東玉 (二中老) 京枝、素行 (三幅對) 小清、花友、

小政、(四天王) 網巴津、住龍、三咲、燕玉、(五人囃) 綾之助、

一二三、八重子、住之助、越子、(六家撰) 小土佐、小虎、能梅、清王、

鹿の子、鶴蝶、(七遊人) 錦土佐吉、音女、照勝、駒辰、東代玉、小住、

以上

豐竹花睦丈

北 隅 芳 洲 軒 靈 史

山の手真打の親玉と評判の丈は候だけなかくの腕と
存候されど言葉の中まよしをちと語らるゝは聞ぐる
しく存候なほ望まじきは足を今少し短かくなされては
如何にや時々踊の様な身振りのあるは見悪し真打にな
りて少し遠慮せらるゝか一体を申せば宮八の時分は面
白く聞申候三の調などは鶴蝶丈まるだしに候兔に角人
氣は可ありにあるのがお仕合前語りを今少し上手を人
あなされては如何と小さき鶴蝶さんに望む。

片月と云ふ人「淨瑠璃は關して男女兩性の適否を
論じ併て住之助嬢を批評す」その長篇を寄せられ
しも餘白に乏しければ殘念ながら掲載せず其大意
は淨瑠璃は女性に適するものと其例を照し住之助
は筆を及ぼして徹頭徹尾彼を賞賛せしなり此に次
第を述べて寄稿の勞を謝す尙他に幾篇の投書あるも
投書規則に反すると字句の明瞭を以て詮
方なく省くことゝなしぬ乞ふ諒せよ。

雜 錄

義太夫語昔日譚(承前) 硯海醉人

(八) 親 交

豐竹一二三

性溫和柔順よて實に女子の風を備へり其幼き時より同情の感盛にして親も菓子等を貰へば必ず朋の集るを待ち而して此を分配したる後に非れば決して喰ふことなし。

(九) 同 情

竹本小住

嬢嘗て寄席を終り住の助及び下男を連れて家に歸りし事あり時辰巳に十二時を過ぐ然るに日々一定所に三味を弾じて袖請ひする老嫗あり小住轉た其情に耐へず彼も三味にて渡世する漢なり妾も同じ三味にて世を渡る漢なり其報酬の多寡ハ經驗

の多少由るのみと日々錢を與ふるを常とせり。

(十) 滑 稽

竹本小染

嬢が家富豪を以て聞ゆ又嬢は性潔白にして其面白き事は在京太夫中及ぶ漢無るべし或日祭祀の時に際し縁起を祝ふ獅子舞嬢が家に來り一曲舞ふの後下道の面を被りて踏る嬢又傍にありて面を取り素面で踏れど居並ふ面々抱腹絶倒獅子舞亦笑ふて面を落す。

(十一) 慈 善

豐竹燕玉

嬢が家慈悲心又富むを以て聞ゆ丈亦人に慈むを以て娯樂と多し親より錢を貰へば皆使はず必ず殘して門お立つ乞食に與ふ

(十二) 長者の言を守る

豐竹駒辰

大阪は名に負ふ娘子供の夜遊ハ繁々しき所

なるに駒辰毎日黄昏の頃に至れば辭令窓より首を出すも必ず外出せず近隣の朋之を誘へは「お母さんが女は十歳以上あるれば夜遊びするものでない」と謂ふたから。

(十二) 端 唄

至て利用まで一度流行唄杯を聞けば家に歸りて「お母さん今の館賣斯様云ひました」とも残さず之を暗記すれば母も其の歸納の能きよは舌を捲きしとぞ。

(十四) 造 華

竹本 小虎 性伶俐穎敏まり嬢幼き時或日母の針箱より小切と鋏を持ち出せり母のの鋏の危きを以て之を止むるも泣て聞かき母是非あく之を許せば小虎大も喜び暫く一室に入りやがて「お母さん」と見せたるは見事の造花まり母之を知らず「誰に貰ふたの」と

聞けば「イ、エ妾が造たの」と云へど母疑ひて一室を覗へば小切の斷片を附木の上へ飯粒のありしを以て初めて自作なる事を知る。

(十五) 昔と今

竹本 小米 嬢が未だ師の門を叩く時に方り途に一人の頭白兒ありて常に丈よ向ひ石を投じ又は棒を振て脅かせりされは嬢も大よこの頭白兒を嫌ひたり然るに或日其頭白兒指を蟹に嵌まれて血液滲出す小米之を見るに忍びず「此所へ御出と」石橋ノ上へ彼の指を置かしめ石にて蟹を殺し彼の頭白兒をして自由ならしむ是より交際親密となる而して嬢は今東京に登て人氣取り彼の兒は阪地道修町の或の酒店の番頭なりと

(十六) 立 往 生

竹本 小政 例熱心に安達原を演技し「妙々」の聲湧く

が如し頓つがて正ただに終おわらんとするにも樂屋がきやにて木きも鳴ならす簾すだれも下くだらず是こゝに於おて丈頓じやうとん智ちを出いだし湯香ゆのみの湯のみを吞のみ干かして高座かうざを下くだる

(十七) 頓 智

竹本小土佐

或ある日ひ嬢ぢやうが家いへに來客きやくありて暫時しばらくたんわ談話だんわせし時とき外ほかに豆腐賣とうふうりの呼よび聲こゑあり嬢ぢやうが母丈ははじやうをして之これを呼よばしむ小土佐こどさ急いそぎに勝手かたて口くち丹に至いたれば合惡あひにくげ下駄たいそく一足いちよくも無なきに少すこし躊躇ちゆうちよする折客せりまやくの乘のりり來きたりし車夫しやふ水みづを吞のみに勝手かたての方ほうに來きたれば嬢透ぢやうすかさず「車くるまやさん御氣おきの毒どくですすが買かつ來きて下ください」車夫しやふいぢむに辞ことばをく一町ひとつも追おつて買あひ來きたれり。

(十八) 至 孝

竹本八重子

嬢幼ぢやうようにして路傍ろぼうに遊あそべる時とき或家あるいへにて夫婦ふうふ喧嘩けんわををせり八重子やへこ餘念よねんなく之こゝに見取みとりし其家そのいへの小兒しょうに突然とつぜん八重子やへこの眉間みけんに石いしを投なす

し桃大ももだいの瘤こぶを生せいず八重子やへこ泣なかす隣家りんかのに來きたりて遊あそばし呉くれんおとを請こふ其家そのいへの主人あにぢ謂いわく「早はやく御家たいていへ歸かへりて藥くすりを付つけて御貫おんひなさい」八重子やへこ暫しばく答こたへず漸ややく口くちを開ひらいて「此これを親様おやさまに御見おみせ申ましたら御心配ごしんぱいなさいますから。」

(畢)

部屋べやの符諜語ふてかご (承前) 是和亭主人

- 拵こしらへる事こと シコラエル 借かる事こと マカリ 汁じゆ ジンダイ
- 内うちの事こと シンカ 出いづる事こと ソリダス 茶ちや シウタロ
- 大おほい事こと ヤツカイ 小ちひい事こと テコイ 箸はし ハナツリ
- 叱しかる事こと サンネンマク 喧けん嘩わ サクミ 帶おびクルリムキ
- 物ものやる タゲサセル 賞もらふ事こと タゲル 揮ふんドセンムキ
- 門かど 附つけケタツゲ 見みる事こと ツナグ 貳しゴロサ
- 知しる事こと リシマス 知しらぬ リシマサナイ 腔うま ヨタヲトパス
- 臭くさき事こと サイグイ 穢きたあき事こと タナキイ 馬うま ロハ

夜具セブリムキ寝る事セブル 舟ウカシ
めくらゼツホ しゃべこと クマヲアガク 貰マゴエモン
爲色事 カツニスル 狂氣 キタヲコ 惚ボレンシタ
惚らる ボレンサレタ 下駄 スンロク

記者へまゐらす

石部金吉郎

おのれ碌に義太夫を解せず全くの素人ながら聞けは面白
い位の感情を懐く精神と任合と有之候就夫聊か斯道の
通人よならんどの不埒を大野心を起し何かる指南車
をと存居候矢先幸に貴誌の發兌ありて其都度購讀仕候
へしが流石に粹様がたの御編輯とありて五分もすかさ

ぬお手際感服の外無之候只恨みらくは女義太夫の評判
紙上の大半を有し中よは愚にもつかぬ評言なと云は、
アラ捜しにて斯道の爲めとも思へず候之を御掲載ある
は幾分が道の品位を汚すの恐なきやと存候望みらくは
今一層御注意ありて高尚の途に進む様御編輯あらんて

とを金吉郎苦りきつて申上候拜具。

社員曰 御注皆の段難有奉存候兼て廣告仕候通ず着々改良の
精神に候得者何れ右の點へも注意可仕候也

桃の屋君の答ふ

翼翼居士

仰の如く太白の現象により勝敗を卜すること孫子十三
篇には無之候得共兵事家が秘密として傳へし所の者に
は此事往々有之故に古の兵の事は孫吳の外に道少なけ
れは兵家の事を孫吳のと書きし點に就ては至極御尤と
存候得共作者の造語とは云ひ難く存候先つ兵鏡其他を
御一覽被下度候桶子の菊水の巻として志貴に傳ふるも
のにも慥ケ様の事有之候かと覺申候也。

門左衛門の墓に就て

服霞峰

大坂寺町法妙寺（本誌第一號に妙法寺と記せしは誤り）
と攝州々々智廣濟寺の兩所あり其墓石共、同質同形
のものにして小さき自然石なり夫婦二行の戒名を記す

法妙寺は近松氏代々の墓所にて右の外に同家累代の墓一基共一本堂の裏面を接す廣濟寺に在るは翁晚年ゆかりありて寺島なる尼崎屋吉左衛門方（船大工なりしと傳ふ）は退隱してありしに當家の長男（菅原は第三子なりと云ふ）出家して釋號を日照とよび當山を建立し翁没して後追善を營み境内に墓をさうけたるなりといふ（濱華墓跡考）後尼崎屋絶家して今は同所の山城屋宗左衛門といふ人毎年一回廻向せりと聞く又山口に妙泉寺といふありて翁か墓あり此名には「妙具院亮固日慧大徳」と云ふ法溢と正徳二年壬辰天四月十九日といふ日附とあり法號年代共異なり是又訝かして菅原は云へり。

つねく草(三)

峰の家主

義經の笈

源延尉奥州下向の時解魔法師に打扮千磨百難を歴て羽

州に至り是よりして秀衡が領地なれば旅装を改め彼館へ趣くべしと主従さはやかに装をうて下られける其時の篋山形の領内七ヶ寺に一つ宛傳來す何れも紙にて張り柿漆にて塗らるもの也義經の笈は小形にて内を觀音經にて張る伊勢三郎か笈は勝れて大形なりとぞ家兄山形候あて義經の笈を一覽せられぬ甚殊勝あるものにて有りしと語られき（桂林漫錄）

同じ格

其磧曰酒の酔のおりやよやせぬとくりごと云ふと。藪醫者の手から咄しと。駕籠かきのきのふの旦那様噂ど。浄るり語り一口かたつて白湯のむとは。癖か餘情か。庭鳥の時うたふ時。羽たきすると同じ格にや（假名世説）

辨慶か制札の文（須磨寺所藏）

此花江南所無也 一枝於三折盜之輩二者
任三天 永紅葉之例 伐二枝可レ剪二指一

三代記の文句

鶴澤蟻鳳（初三村蟻鳳養子）鎌倉三代記といへる淨瑠璃のうち姫君の水仕するところの文妙なりとぞ口づからつたへし（詠吹）

おけにひしやくと、さましくに、名も聞はじめ天人の、おりぬの清水むすばうれ、くめどもそれの水しの手品、かへりかねたるつるべ繩、戀路に思ひまいらせの、筆より外はもたぬ手にどうかしくやらしらげのよねに、心ばかりのはてしなき、

雑報

○諸藝人懸賞投票當選者 嘗て本社か女義太夫の五名家を募りしが世の催促とるり俳優の投票あり藝妓の

投票あり娼妓の投票あるなど大流行となれり改進黨新聞も亦其熱に感染して題號の如き投票を募る義太夫の連中にて當選せしものと竹本住之助（高點）竹本京富

（次點）の二嬢なりし改進黨記者云ふ世人が是ぞ將來の達人なるべしと思惟する者を投票されんとを切望せしなれど自ら運動を試みし者もあり或は之を辭したる者杯もありたれば其結果豫想の外又出でたるものも幾分かあれど云々と既に此語あり公平と云ふ能はず所謂藝より虚名を賣るの徒正直ま之を云は、見臺稼きといふも過言にあらざるべしと慷慨生としての投書

○竹本越子 座頭が悦に入るやうな眼付に評判の同嬢は投票の非を悟りて之を世に辭し二拾圓を養育院に寄附せしと流石は水道鍛へ感賞の外なし唯惜むらくは廣告せし時日の遅かりし爲京童の種々お噂ををるこそ心憎けれ。

○大隅丈の來信一團平老の外傷 神戸市よて興行中の大隅丈より社員のもとへ左の來信ありたり。

拜啓陳は存外の御無言仕候段平に御宥許可被下候向毎々貴誌の御惠投を辱ふし千萬難有奉謝候小生も歸

阪の上彦六座へ出勤の心算に御座候處未だ其場合よ
 はこばすの 不運且つ久々の歸阪とて諸處よりの御招待も有之候
 へども都合上神戸のはり半座にて本月一日より興行
 仕候處意外も大入にて初日より客止の姿夫故他の
 興行物にさしひゞき壯士芝居の如きも大に迷惑至せ
 し様子にて中止もならんかの趣なりしか天災は何
 處よりなるか四日目の夜不幸にも團平氏過つて二階
 より墮落せられ左手に大怪我をなされ候爲當地吉田
 院長よ六針斗り療治を願ひ候御老体の上るれば如何
 かと心配仕候處幸も漸々はかどり候様子なれば來
 る十一日より出勤の都合に御座候何れ委細は後便に
 て可申上候先は御禮旁々如此に御座候拜具。

九月八日

竹本大隅 太夫

○義太夫社中の大會 去る十日江東井生村樓に於て
 けいひんなん なんによた いふあいくわい れいれん ける
 京濱間の男女太夫相會し例年の如く一般の協議會を開
 けり本社へも招待ありたれば岡田の膏藥と服部の微笑

が社員風ふかせてノコく出掛たれば知らぬ太夫連は
 此の二人を見て何時アンナ髻のある太夫が出来たかと
 徴語しものも有たる由會場の正面に小野お通近松巢
 林、鶴澤撥校、竹本義太夫、の四畫像と天照皇大神并に
 義太夫の系圖を掛け尙側に古びたる一幅は義太夫の肖
 像よして野澤鶴蝶嬢よりの寄附にありしものなりと（
 肖儀の上に。一りんの菊の流や汲所。正徳四年蛙井と
 あり珍らしきものと云ふべし）此日集るもの政太夫綾
 瀬太夫播磨太夫を初め百數十名にて協議の件にて結の
 あがりしものは自今月掛金を廢し之に代ふるに興行を
 以てする事磯太夫を頭取に定むる事府下よ一の興行場
 を設置し大阪の文樂座に倣ふて男太夫は年中此よ於て
 人形に付き興行し他の寄席へは出勤せざる事等なりし
 因に日來月早々小川町の新聲館を借受け國五郎の人形
 にて綾瀬播磨の一座が興行することに内々一定せしよ
 し。

○又 右の如き大會を催し種々の協議をしなから織瀬播磨を初め誰一人風儀の一點に注目せし者多きは男太夫も亦氣力なしと云ふべし。

○義太夫の墓 兩國回向院あり壽樂微笑は歸途立寄て一本の線香と左の拙句を手向て歸る。

千代経てもかはらぬ菊のよほひ哉 壽樂
○改進新聞賞品授與式景況 牛込の末廣家要人氏より特に寄書ありしも誌面の都合より次號に譲る。

○勾踐家々扶 なる人堅胃堂の辨護的投書をなせり只あせりと云ふ丈にて何の事やら分らざれば省く。

○東京の人形座 大阪文樂座の如き者を設立するは吾輩至極賛成する處なり望らくは十分永續の方法を立て彼五りんの如き者の干渉をして速に避られん事を。

○紋左と豊吉 共に是府下三絃彈の能あるものにして其鼻の高き事能に越ゆる幾等酒を以て己が友とし爲に

間々太夫をして迷惑せしむる事少からず過日新聲館

にて興行せし折も二人共樂屋の折合悪しく爲に卒倒となり爲に醉臥となり其不始末云はん方あかりしと道の爲には好せしからぬ人と云ふべし。

○懲戒法 義太夫社會にも一の内約を設け懲戒法の如きものを定め藝人中若し不始末などある時は之に照してドシ／＼懲戒を施すことにしては如何さすれば少しは取締ることあるべし。

○竹豊連の會合 去る十六日午後より本社編輯局にて開く集る者十三名左の數件を談じて散會せしは同六時頃なりし。

○竹豊連を竹豊會と改むる事○會日を第三日曜日と定むる事○毎會會員の演說並諸大家を聘し演說を依頼する事但し會員五十名○廣く傍聽を許す事○末廣家

要人、樂壽亭、樂、降の家霞を常務幹事と定むる事○會員に限り義太夫雜誌を二割引にて本社より買得る事

○會員證を出す事等にてありし。



情歌題

笑。泣。迎。恨。

○

今日から行末笑て暮す元の苦勞ふ引替て 出寶題

来る氣て無のふ途浮々と遅さ爰迄出た迎 布袋家唐子

話し半へアレ意地悪な主を迎ひの人力車 笑亭主人

眞面目で話を消氣か憎い笑ひ乍に爲返事 寶 來

旨く欺した涙の跡を主にや明して笑い顔 青木芳州

馬鹿おふ客と思は故と旨く空泣して止る 辨香 醉史

○會話調

アラマ其様に笑は嫌よ種を明て話すから 東紫朗

○秀逸

來ると約束して有ものゝ若と出たる迎文 ゆきの家薫

評 ほとんど氣かもめるよ

恨の數々文では云を逢はさすがに口籠る 笑亭美三絲

評 じれつたいのね

待身の苦勞を知ぬか憎や隣で氣無の高笑 關口君子

評 ほとんど人の氣もしらぬいで

○感吟 (贈本誌)

思かへせば今更苦勞文に恨の云ひすこし 東紫朗

評 案じる程でもありません今晩あたりは

必ず嬉しき顔がイヨお樂しみ

○追加

何して彼様に恨だ事と逢は恨だ氣が知ぬ 社末ひげ奴

早耳はなし にあく男

取次の小僧が編輯局へ來て『只今錦織さんが『錦織?』

可笑な相馬事件に關係した事もないがと出て見れば骨

皮道人氏なれば驚き可笑さ隠して小僧よ向ひ『以後氣

を附ろ

餘興 冠句附いやす事 末はどうする 一題五句吐

課題 切十月廿日 秀逸本誌呈上

○寄贈書籍雜誌

自九月一日
至同三十日

- 東洋文學 十二號 千葉縣安房郡北條町 智發堂
- 海國子 四號 兵庫縣揖西郡龍野町 英館
- 文明之兒童 二十一號 備中國小田郡笠岡町 徽州文社
- おさん戀八卦桂曆 近松門左衛門作 兵庫縣攝津國神戸市相生町 平安堂
- 扶桑 十號 靜岡縣富士郡上井出村 嶽麓社
- 音樂雜誌 三十五號 東京市麹町區有樂町 音樂雜誌社
- 其まゝ 十九號 靜岡縣城東郡大須賀村 月旦吟社
- 禁酒矯風 五號 鳥取市東町 禁酒矯風發行所
- 富山日報 一號 富山縣總曲輪 富山日報社
- 新文海 七號 岡山縣小田郡笠岡町 徽州文社
- 静岡文學 二號 静岡市大鋸町 静岡國語傳習會
- 大坂經濟雜誌 十二號 大坂市東區瓦町 大坂經濟雜誌社
- をしへ 六十二號 岡山縣岡山市小橋町 耳目堂
- 海國子 五號 兵庫縣揖西郡龍野町 英館

新文海第七號附錄

九月十日發行



第七號要目九月十日發行

每月壹圓 ● 定價壹部前金四錢五厘 ● 壹ヶ年五拾壹錢 ● 全國無遞送料 ● 郵券代用(五厘券に限り) ● 壹割増 ● 壹錢貳錢郵券は二割増

教育學論文 山田 寬
支那貨幣論 山下 寬
國史眼批評を讀む 日下 寬

文藝門 文拾篇、和歌四拾七首、詩廿九首、雜纂 俗說辨妄(續)

黃薇餘芳 (唐詩磨礪歌(石坂空洞)、洗冤小言序(西薇山)、盧璧日記(關藤政方))

懸賞課題 (文二編、詩廿二首、和歌百、六首、發句百句)

教育と宗教の衝突顛末及び評論を讀む 小西瓢庵
偶感 忠君愛國とは何ぞ 矢野貞城
杞人の憂 三度瓢庵氏の正道と邪教の辨を駁す 八濱掬泉

懸賞課題募集廣告 ● 和歌夜風如秋。竹久縁。立秋。隔戀。月前虫。故郷露 ● 發句水室。暑。青嵐。夕立。氷賣。心太。一夜酒。火取虫。川狩。夏やせ。初秋。稻妻。花火。踊。露。ちり柳。西瓜。芒。とんぼ。はせ。夜長。野分。月。花野。雁。きぬた。新酒。松茸。いぬ。葉鶏頭。

賞品 天：時計壹個。地：名家書幅壹軸。人：反物壹反。切九月三十日。期限經過の分は次回へ

● 入式 和歌壹首壹錢 ● 發句拾句壹組三錢 ● 貳組五錢 ● 以上壹組每壹錢増し ● 郵券壹割増 備中空岡町 大字笠岡

發行投吟處 徽州文社

○編者曰、本書はワザと訂正を加へず暫く原本のまゝに記す

高師直 塩谷判官 太平記忠臣講釋

作者

近松半二
三好松洛
竹本三郎兵衛

目出度君の御威勢。營宮高城道具とめ。乗物下馬のもり砂も。巖とならん鎌倉御所。出仕登城の乗物先。所せきまで進物臺。つみなとべひかゆれば。藥師寺治郎左衛門聲をかけ。途中の目見へ苦しかるまじ御對面なされよと。乗物立れば立出る時の出頭。高武藏守師直。家來を遠ざけ近く。詞そち達はいつれの家來ぞ。ハア桃井播磨守河野大炊之助家來共。いづれも此度饗應司の役目。委細御傳授に預り。身の大慶是に過ず。寸志の御禮輕少なご。黄金百枚并に卷絹。御受納下され候は、有がたからんと相述る。是は。夜前といひ今日と申町寧の御禮。此上ながら隨分とお差圖申さふ。後刻營中にて貴意得んと傳へてくりやれ。其進物は苦勞なが。直に身が屋敷へ持參仕やれ。太義くどはやく顔。兩使は悦び立歸る。詞ナント藥師寺殿御らふじたか。此度の勅使儲。大切の規式格式を存知たは師直一人。指圖を受る禮として。それく心の心付かうなふては叶はぬ所。其中に第一の役人塩谷判官。あやつ大の馬鹿者。其くせ吝嗇者と見へて。是程の大事を頼に或は桑酒。干看様の送り物。師直を踏付た仕方。成程左様。じたいきやつが日頃から仁義立が氣にくはぬ。殿中で大恥か、せ。重ての見せしめになされ。そこはぬからぬ。夫故に何事も傳授致さず。詞ヤアあれ。あれへ来るは塩谷と見へた。其元はまづ登城。萬事は後程。然らば先へと立別る、間もなく。伯州の城主塩谷判官高貞。家來矢間十太郎に菓子折一籠取持せ。詞夜前ね屋敷へ推參の所。御不快と有故氣づかはしく

義太夫雜誌附錄

○今朝早速御見舞申せしに早御登城。御氣分あしきに御勤御苦勞至極と挨拶に。指出す進物じろりと。詞壺谷殿警枕が上らいでも。た上の御用意る様な師直ではおぎふぬ。菓子たべたければ手前にも所持致す。左様の賂賄受て。式法を御傳授致す師直と御らうじたか。是はく左様ではなけれども。諸事も引廻しに預れば畢竟拙者は門弟。師を重んずる志斗。ね氣にさはらば御用捨なされ。此度の役目何とぞ首尾よく勤る様に。お指圖下さるべし。詞例年の格式は。今日御對顔明日能有べき所。當年は格別の御沙汰。今日直にね能ある由。第一心得ぬは衣服の義。えぼし素袍着用致してよかろうや。ね能御配膳の爲には。のしめ長袴たるべしや。いづれども御指圖希ひ奉る。此義いか仕らん。師直公くと。いへど一言答もなく。詞ハア昨日我君より仰付られし御用は一つは是よ。今一つは何やら、夫よ大事の御用。家來共早供せよと乗物にのらんとすれは申く詞只今ね尋申た義を。ハア扱。其くらわの事は尋いでも大方しれてある事さ。夫程不案内ならば。なせ夜前にも尋ねめされぬ。イヤ其の爲にお屋敷へ参りしかど。御對面なされぬ故。ア、コレく何かといふ中大切の御用が延引。家來共早いそげと。詞にちりもはいくく。乗物いそがせ別れ行。十太郎は血氣の若者。詞申殿役目を甲にきれば逆余りの不禮。こりや師直が心に一物。ア、コリヤく。籠相いふな。我儘無禮は生れ付。此役義仕課せる迄は。たどへ脚をもたせても。堪忍を守らねば勤がたき大事の前。短氣のふるまひ仕るな。此上の登城の上折入て指圖を受ん。詞も最早勅使も御入の刻限近しいさ來れと。事を慎む大名風。胸に余境は有明のあくる御門や。三重大樹足利直義公。緋の御裝束白書院。上段の御坐に着御有。わざと袴は敷たまはず。勅使葛城大納言。御太刀目録御馬代宣旨の趣述べ。謹で頂戴あり。師直是を受取て御床に納置。續

て院使女御の進物。勾當の内侍より。中高十束御献上師直。下段の敷居より。判官くと呼はれ共。答な
 ければ猶こは高。詞判官は何ししてゐめさる。早來られよ判官。くと呼追々に。呼立られて鹽谷判官。素袍えび
 しも取あへず。ハッくと呼畏る。詞ハテはてくと呼何故の遅參。東宮攝家内侍方の献上物、御納戸へ納め
 れよ。早くくと呼顔も。にがり切たる不嫌顔。諸士の手前の恥辱より。君の御氣色いかゞぞと恐れ入たる
 。役目の大事。勅使は下段に座を改め。自分の御禮御挨拶。早御對顔事終れば殿上。の間へ對座有。溜の間
 より出来る。藥師寺がしたり顔。詞武州公出来ました。何が鹽谷めが。貴公のれ指圖がないから。諸大名の
 裝束を見て俄の轉倒。えびし素袍着替る時のあはてさま。夫故遅參で先一つ不首尾の初り。ヲ、サくと呼是か
 ら又仕様のだんくと呼。今日のお能は例格の外俄の規式。うろたへさがすを見る様など。黙き叩やく佞人の。
 工としらぬ鹽谷判官。それと二人が立て行。のふくと呼武州殿。まばらくと呼とめ。勅使方へ御進物。先達て
 我等御使の由。いまだ御さは是なきや。存じ申さぬ。左様のおとを今頃に尋て事がすみませるか。師直は御前
 の御用が多い。其元に物申てれる間がおざらぬとふり切與へ行過る。あと打ながめ。詞ハテ心得ぬ今日の振廻。
 事むつかしきは日頃の氣質と思ひしが。最前のおとばと云ひ。全くわれに恥辱を與へん結構と覺ぬたり。エ、
 一生の浮沈何とせんと無念に心かさくる。折から藥師寺聲高く。詞鹽谷どのくと呼。ね能の場所へなせお出
 なされぬ。大廣間へ早くくと呼。ナニ勅使には殿上の間に御休息と存せしに。早お能か始つたか。始つた段か。モ
 ウ中入前。ハッ。是はくと呼然くと呼は衣服を改めて。ハテ御用がある先早くと。せつく詞の中の口。矢間が持てくる間
 もなく。詞衣服はあとで。マアおざれど。無理に引立走り行。十太郎は心ならず。エ、今少しれをかりし。れ上の

首尾はいかゞぞとわんじ煩ふ主ねもひ。奥を見やつてとつ置つ心をあせる書院先。思ひ有げに判官は。廣間を下る後の襖。ぐはらりと明て高の師直。詞いかに作法をしふねばとて。能の場所へ素袍をばし。ア、不調法千萬。假令身共が傍に居たればあそ。勅使へ不禮君への不届。夫では万事思ひやふる。其元の様なぐどんものなるばし装束は。正眞のだちん馬に唐鞍置た様な物。たしなまつしやい。去とは馬鹿では有はいと。悪口聞かね十太郎。反打かくれば。詞コリヤ。身共が誤り有ばあそ。師直殿のねしめしなさるに推參な若輩者。倍臣のくる所でない。下つておふふと呪付る。主も家來も堪忍情。胸をさすつて立出る。詞イヤ。早仰の通り不調法な判官。何卒とくと御傳授あつて。饗應の役目首尾よく相勤る様に。サア。師直に如在はない。随分心を付めされ早お能も中入。配膳の用意。アツと答も心せく。虫をおさゆる長廊下。權威を高の師直が。きめてくれんど口なめづり。胸の献立七五三。用意に時あそ移りけれ。すでに御膳の刻限と。塩冶判官高貞長上下のしづくと。給仕の膳部目八分。師直見るより。詞コレ。待つしやれ判官どの。こりや何じや。勅使の御膳は三方。本膳の料理も違ふて見ゆる。こりやコレ。紅葉の間の饗應。殿上人の膳部。ハテ。扱々鹿相千万。イヤ。先達て斯の通り貴公より御差圖。ハテ。扱馬鹿な。身共がなんの其様な鹿相申てよいものか。我誤を人にぬる。彌以て不届至極。じたい又人に物を習ふにはそれの禮義と云ふ物がある。其禮義のすべさへ知らず。事知自慢で自分計ひやふるから。最前の様な不調法。一度ならず二度ならず。左様なことでは所詮饗應司は勤らぬ。もふ用事はない立つやれ。早く歸つて休息めされと。膳部をはたと打落しせきを蹴立てかけ入たり。料理もさんらん氣は狂亂。堪忍の二字今こゝに。家の斷絶時來りし。是非もなし是までなり。饗師

◎編輯日本書はワザと訂正を加へず暫く原本のまゝに記す

直達ちたつさじと胸むねを定めて入たまふ。斯かくとはしらず石堂いしどう右馬之頭まぎやうまぎぎ。柳やなぎの間の取持とりもちよ心を付る年としばい役やく。椽はんを折をりから聲こゑ々に。スハ事こところと御殿おんどのの騒動さわどう。大名だいめい小名せうな行違ゆまちがひひ。殿中おんちゆうは口論こうろんありめい／＼詰所つめしよをかためよと。いふ聲こゑ次第しだいに聞傳きこつたへ入亂みだれたる。三重みやへさわざあり。大下馬おほしたま先には諸方しよかたより。馳來かひる人馬ひとまの音ね。中なかつも鹽治しほぢの屋敷やしきよりかけ付る大星力彌向おほしほぢふ石堂いしどう縫之助馬ぬいすけうま乗放のりまはなし行合ゆまひたり。力彌ちからやてないか。縫之助ぬいすけの助すけ。殿中おんちゆうの騒動さわどうはまだ誰れ共相知れ申さず。心こゝろになきは主人しゆじんの身の上みのかみ。サテ、我も氣つかえしく。早馬はやまもてかけ付たれ共御門ごんもんを打て人を入いれず。エ、羽はねがふほしやと高築地たかねづち。はるかゝ見上みあがて立たる折まげから。御門ごんもん開いて網乗物あみのりもの警固けいこは石堂右馬之頭いしどうまぎやうまぎぎ。さる嚴重げんぢゆうに出来れば。ヤ親人殿中おんちゆうの喧嘩けんかは誰れなり。承うけたまはつて落付おちたし。ヤさはがしい縫之助ぬいすけ此石堂こゝろが體からだに過あやまち有る逆さかも。お上にさへ虚事きよごとなければ驚おどろく事こと少しもな。既に事治ことをさつた上立驢たぢまば上への無禮むれい。屋敷やしきへ歸れと言捨ことごとて乗物のりものいろがせ歸らるゝ。ヤ何國なにくに迄も主人しゆじんの供ともと。狂氣きやうきのこどくかけ出るは。ヤ十太郎じゆたろうか。喧嘩けんかの様子ようす心こゝろになし。主人しゆじんの身の上みのかみいかゞ。オ、喧嘩けんかの相人あひては高野師直たかのしぢ。主人しゆじんに重かさなる耻辱ちぢぶくをどらせ。元もとより短慮たんりよの破やぶ口くち。勅使ちやくしの御前ごんぜんも御厭ごいとひなく。只一刀ただひとに切付きりつけたまふ。御尤ごもつとは言ながら御身ごんみの大事だいじと成たはやい。シテ師直しぢは御仕留しりぞめさせしか。サレ御鬱憤ごうつげんのかいもなく。敵てきはわづかのかすり疵きず。我は御前ごんぜんに有合あひあさず。直ちかに御殿ごんどのへ切込きこめどは思おもひしかと。猶々なほ主人しゆじんの罪重つみおもらんと。拳こぶしを握にぎつて指扣さしひかゆる。口惜くちをしさを推量おしあせい。ナ、何といふ。すりや今の網乗物あみのりものが御主人ごしゆじんに有たかいで追付おひんとかけ出す。ヤ判官はんぐわんが家來けらい共ども。ろこ動うごくなど聲こゑをかけ。網代あみしろの乗物のりものびしくも。引添ひきそひ出る治郎左衛門ぢらうざゑもん。そこなヤイ扶持ふぢ離れ共ども。耳みみをさらへて承うけたまはれ。鹽治判官しほぢはんぐわん殿中おんちゆうを憚はぶぬ狼籍らうぢやく。不届ふとど至極ごく思おもし召めれ。罪科ざいかは追おつて先まお預よけ。又師直またしぢ殿は上かみを憚はぶり。柄つらに手もかけられぬ神妙しんみやくの仕方しやうほう。御感心ごかんしん斜なならず

手疵保養てまつばやう。御典藥迄お付なされ。只今歸館きかんあさるゝはい。其乗物がどかけよる三人さんにん。無念なる浪人共らうにん。コノ縫之助ぬいすけ。御邊は石堂の養子なれど元は鹽治か弟せいで。どふ崇たうりがこふも知れまい覺悟かくごお仕やれ。浪人共此乗物にらうにんども指てもさすと。彌鹽治は重罪人。手向ひするか。夫は。何と廣言惡口指もならぬ時の權。齒を喰まばつて立歸る。無念成ける次第なり

第二

堪忍の文字は貴賤の寶なれ共。時によつては止事を鹽治判官高貞。一旦の短慮たんりよよて鎌倉にて御身の災わざはひひ。しらぬお國の御城内家中集りざゞんざやら。舞つ諷うたひつ酒機嫌さけぎげん。小寺重平竹森喜多八。庭の堤で武藝の勵げんみ其争あらひぞ君子あたらなる。當りくと矢取やとりがかけ聲こゑ。一手ひとてくくくに古實こじつの射法しゃはう。一寸二寸のかけのより。心づかひに仇矢あたやなき。大星由良之助の内寶。屋敷模様やぶかたの襦ゆも。じみろ家老けらうのおかもじ風。腰元引連一間を出。是こゝに小寺様竹森様。御酒宴の座敷をはづしてよい手な仕様。志こゝろたが靜謐せいぎつな御代に。武藝のれ心がけは御奇特ごきせき。わたくしも座敷であなたこなたのお間あいをして。詞多ことばきは酒機嫌さけぎげんお救ゆるしなされてくださりませと。家老の妻かよの顔かほもせず。詞ことばを廻まはす發明はつめいは。實に大星の室家しつかなり。是は石様の悼いた入いたる御挨拶ごあいさつ。此喜多八も御酒が過よて酔醒よひさしの弓のけいこ。わたくしは常々一すいも給たまね共。大星様のお饗もてなしで。重平が腹は酒漬さけづけ。ナ、氣疎きそ。忠義ちうぎでも不忠ふちうでも。まさかの時でなければ。武士の腹せんさくは切服の時。不吉な事あつしやれずと。早さあお座敷へこまば中へ奏者番なつかは。只今御家老の九太夫様。ち金役三左衛門様。御登城と訴うたえられは。ナ、其通り申上ふ。竹森様小寺様

ど。打連奥うちつれおくも入間いりまもなく。相家あいか老斧ふるおの九太夫。家中うちでぱりつく麻あま上下かみしもも。のつし鬘斗のまゆ目の人体あど年としばい。後に
 續ついでて金役きんやく早はやの三左衛門さんざえもん玄關げんかんより入來いりれば。しらせに出向いふ家老かろう職大星しやくたせい由良よし之助のすけ。祝義しゆぎの上下かみしももさばやかに出
 立たち。是こゝはく九太夫くじうたふ殿どの三左衛門さんざえもん殿どの。早速さつそくの御登城ごとうじやう御苦ごくる勞らう様さま。イヤも御拙者ごつしやより。御亭主ごていしゆ役やくの由良よし之助のすけ殿どの。嘸まお
 心こゝろづかい。早朝さうさうより登城とうじやう致いたす筈はずなれ共。悴はぢ定九郎じやうくわうは鎌倉かまくらへ參勤さんきんのお供とも。去いるによつて一人ひとりの孫まごめが。祖父そふを
 廻まわして放はなしませず。見みれば又また憎にくふもござらず。漸やう三左衛門さんざえもん殿どのが見みへまして同道どうだうを仕つかつた。成程なるほど九太夫くじうたふ様さまのお
 つしやる通り三左衛門さんざえもんが悴かへい勘平かんとへい。不届ふとどござつて殿どのの御勘當ごかんたうなれど。寐ね覺ざも思おもひ出いしまするは子が不ふ便べんさ。
 ナ、成程なるほど親心おやこゝろでは尤なほ。扱さて此間このあいだも申まを通り。此度さて年始としのあひだの御勅使ごていし鎌倉かまくらへ御下向ごげかうによつて。殿様どのさまと桃井はなゐ播摩はま守まもり様さま。餐應けうおふ
 司役目まのやくめを蒙かかりたまふは殿どのの譽御家ほまれおんいへの規模まほ。急度きつど悦よろこび奉まもれとの御意ごい下くだり。去いる十一日じふいちにちより十四日じふよつにち迄まで。餐應けうおふの御
 役目やくめ相濟あひたひと存ぞんじ。今日こんにち一家いけ中ちゆう打寄うちよ殿様どのさまよりの御酒頂載ごしゆてうだ。最早ま諸役人しよえんざいじんは御成ごなりの間まで酒宴しゆゑん最中さいちゆう。ア、謠うたす舞まい
 すると。由良よし之助のすけ聞耳立きみみたて。玄關げんかんの番人ばんじん參まれ。聞きば御城内ごじやうないに大勢おほぜいの人聲ひとこゑは何事なにこと成なりぞされば只今ただいま大手おほての御門ごもんに凡
 三尺斗さんしやくとの蜂はちの巢有すあひ。山蜂さんぱち一ひと疋ひつ飛來とびつて巢すの邊あたりを飛廻とびまわりしよ。彼の蜂はちの巢すより小蜂こはち多く飛出とび出で。山蜂さんぱちを差殺さ
 す間まもなく。數萬あまたの山蜂さんぱち群ぐんり來きつて。小蜂こはちを殘のこりさ差殺さし飛去とび候さう。是こゝを見る人ひと珍事ひまろしなり逆群とくてくん集任じふ候さう。と申上まをれ
 ば。是こゝはふしきと兩人ふたりも何なにと。評ひやうする事もなし。由良よし之助のすけも蜂はちの戦いくさひ胸むねに當あたれどさあらぬ鉢はち。それはあやし
 き事ことならず。蜂はちも戦いくさひ蛙かへるの合戦あひせん。山林水邊さんりんすいへんはまゝ有あり事こと。蜂はちの中ちゆうにて尾おしも毒どくなきを蜂はちの頭かしらとする其蜂そのはち小蜂こはちに
 差殺さされたるによつて。山蜂さんぱち怨うらみを報むくふと見みへたり。蜂はちは元もとより節義せつぎを守まもる虫むしなれば。嘸まあらん。是こゝを思おもへば
 人ひととして。忠孝ちゆうかうなきは彼の蜂はちにおどつたり。侍まむらひは猶なほ以もつて蜂はちころはよき鑑かみと。未然みぜんを察さつする由良よし之助のすけ後に思おもひ

合すれば。扱てころ蜂の戦ひも。鹽治の家に災の其前表としられける。九太夫はにたく笑ひ。御家老の講譯承はつてゑとく致いた。したか。虫も生有物故出頭をろねみ。差殺した物である。ホ、チ、かつしやる通り人でも虫でも心がなくば論及ばず。一寸の虫も五分の魂。とかく世界は虫を死すが武士の嗜。九太夫殿。三左衛門殿。先々奥へ。然らば左様仕らん。老人の遅參御免有れ。いざ三左衛門來られよと打連てこそ入にける。奥は祝義の聲高々。君はちよませくと。壽を祝ひ納めても。胸をさまらぬ由良之助。蜂の戦ひ氣がりと。工夫を廻らす時計の一間。辰巳角の櫓の遠見あはたしく。鎌倉より早打と見へ。御城の馬場先を押來り候と申上れば。吉凶はいかよと由良之助椽も立出。今やくと待間程なく。數多の八歩。乗物手玉につきくもまたく息。しらすに乗物昇居れば。由良之助聲をかけ。早打に來しは忪力彌。女房參れ。息次に水一口。早く様子が聞たしと。父の詞に服帶ながら。力彌しらすよ折立て。今日の早打は殿の御大事。はつと驚く由良之助聲はり上。鎌倉より凶事の早打來つたり。諸士の面々參つて。子細を聞れよと呼ばれば。酒宴の席も俄よさんらん。斧早竹森小寺其外諸役人。追取刀でかけ出く。子細はいかにとせき立つれば。力彌息をつきあへづ。されば殿様養應司の御役目。十一日より十四日迄首尾能お勤遊ばされ。白書院にて勅答の規式有る所。高帥直執權の職も誇。殿へ不禮有しと見へ。殿中にて師直を刃傷に及び賜へ共。雙方共に御存命。網乗物みて御城より御預と成賜ふ。夫より直に馳參し候故あどの子細は存せず候。追々注進御座有るべしと。色を變じて述べれば。並いる諸士とはつと仰天。母は力彌の側により。ろなたも嘸驚。定めて心がつかれうに。よふ早打よおじやつたのふと。背撫さそりいたはれば。父は力彌をはつたにとらみ。かゝる主君の御

大事に。何進注進延引せし。不屈を悴め。我が目通りへは汗はぬ立つてうせふと。いかりの面色。アはつと斗に詮方も。力彌は案に相違して。しをく立て入にける。是は又心のない父御の御阿我子を最負さるてはなけれど。町人であの年なれば。手せきのけいこ最中。鎌倉より此伯耆迄二百里余り。五日半に來りしは出かしまつた。響はなされいで。遅い迎お阿は。殿様の事聞て。當惑故と存ます。九太夫様は御老躰お前が狼狽なざる々と一家中は闇。レ氣を慥に遊ばせと諫る妻を見向もせず。只今力彌を注進遅しと呵しは。彼れ殿の御大事を聞より。我々に告しらさんと思ふ一念にて。二百里を五日半とよの常ならづ。ナ、悴早かりし出かしたりとほうびせば。はり詰たる一心の釣緒忽切て命を失ふ。其期に及んでは嘗婆遍鵠でもいつかな蘇生する事叶はず。去るより張詰たる心をたゆませぬ様に。扱ころ只今呵しと。聞にお石も返答なく。物に馴たる大星殿と諸士もかんずる斗なり。九太夫真中に進み出で。アいづれも摺治のお家の御大事。高下によらず祿を頂戴する者は。臍を堅て分別所。双方御存命と云ながら。折といひ。全く殿の御誤り輕ふて流罪。重ふて切腹。夫を思へば胸にせまつて。智恵分別も中々出ぬ。由良之助殿に魂に余境が有て。子息をお阿りは驚入たる大丈夫何かといふ中二番手の早打來らん。此一左右が御家の決着。一家中の身の安否何れも退座無用なりと。いへば皆々息を詰。二番手遅しと待いたる。九太夫殿の御詞御尤此由良之助が存るは。御代穩に治り武士も町人と同じく妻子を育枕を高ふ臥らふと思へば。ふつてわいたる殿の災。併双方お命に別義なければ。御知行減少して。お國がへと思はるゝ。是からは家老用人すべて一家中。大小を差ながら鋤鋤持すば成まい。ア思ふ様よはならぬ世界。箇様多事とは存せず今朝より亭主役まで甚草臥。又早打の參る迄不禮

義太夫雜誌附錄

ながら暫く勞をはらし申さん。何れも是よさつて御評議を頼み入る、石も參つて介抱致せ。ア、是からはろるばん秤の目をせゝらすば成ますまいと。身のかくまひを一向に。口ははいへど心には。殿の御身の納りを。胸よとつくと疊込欲と見せたる大星が。所存を神も白書院。夫婦打連入にける。九太夫あどを見送りて。ア、侍の風上よも置れぬ家老。主君の事は毛頭思はず。其身の榮花を思計るは見下げ果たる由良之助。彼が詞を用ひあば万人の讒を受ん。今よもせよ追ての註進又來らば。善惡によつて一家中の魂定めと。いまだ詞も終らぬ所へ。遠見の足輕かけ來り。二番手の早打と見へ。乗物二挺押立參り候と。聞より皆々立上り。九太夫せいたる顔色もて此由良之助は何してゐらるゝ。かゝる大事よべんくだらく。襦の裾小短く夫の口上。由良之助義。このの外勞まして御酒たべてれりまする。早打が參つたらば。宜う御評議。コレ御内證。家老職がろふいふて何と埒がひる物ぞ。御内證諸共に。重平參つて同道しめされ。早ふくと追々の使に。是非なく由良之助。殿の凶事に胸の關所はふさかれと。通る物は酒計吞すへたれば一向に心もすとり目も居れと。酔ぬ顔して座敷に直り。何れも御苦勞。二番手の早打參る由急度承知仕つたと。早卷かける管よりも。細引人歩がエウウ。體とひつたり汗車。二挺の乗物御しらすよとつさりと。おろせば九太夫聲をかけ。只今の早打は矢間十太郎と悴定九郎な。五臟六腑を揉切たり共。肺の臟全くと。者の言れぬ事有まじ。早ふ注進。早ふくと老人の氣はぬら立て。重太郎咽を潤し。とみたる眼に涙をそよぎ。先達て力彌殿の御注進に御聞の通り。十一日勅使御とあ着的の始より。定九郎殿と某。殿のお傍に付添奉。十四日勅答のとき兩人ながら配膳の御役に伺公の中。殿師直を及傷よ及ひ賜ひ御誤極り。御預の館にて殿は其夜御切腹と。聞よりはつと並る諸

士。水みづ離はなれわたちの魚うをひれ伏ふせ吐いき息いきをつく斗ばかり。九くだ太い夫と五ご躰たいをふるはしむがらシテ。悴せわれ。御ご舍や弟あに縫ぬい之の助すけ様さま。御ご家いへ相あひま續つなさるゝか。さればあなは御ご別べつ條じょうなく石いし堂どう様さま御ご入いり。屋やし敷しきも即そく座ざに召めし上あげられ候まうと。いわせも果はてず刀かたな追お取と。しらすは飛とびおり定さだ九く郎らうが。髻たぶら摺すりでぐつと引ひ寄よ。卑ひ怯きやう者もの憶おく病びやう者もの。其その節せつ臂うで配はい膳ぜんの役やく成なり共ども。ろくざにかけ付つけ師し直ちやうを討うち留どめ。ませ殿どのの御ご憤いきまを晴はらし奉ほうらぬ。さなくんば鎌かま倉くらまで追お腹はらと仕つかま。冥めい途との御ご供まを致いたさぬぞ。生いきながらへてのめく。とのつらさげて此この早はや打うち。エ親おや進ま武士ぶしを捨すてさす悴せわれ。見みるも中な々な穢けがらはしと。老おいの腹はら立たち氣きの張はり弓ゆみ。おつ取とりてりうくく。なぐり立たたれ定さだ九く郎らう。拙せつ者ものも左さ様さま存ぞんせしかと。今こん生じやうまで只ただ一ひと目め。親おや人ひとに御ご對たい面めん。まだぬかす家いへを出でる時とき妻さい子しを忘わすれ刃やいばを取とりて其その身みを忘わするゝとは。戰せん場じやうへ越こく武ぶ士しの心こころ得とくさり切きたる根こん性じやうな悴せわれ。御ご城じやう内ないには暫せん時じも叶かなはぬ。勘かん當たうじや出でてうせう。長なが居いせば手ては見みせぬと。父ちちの怒いかり定さだ九く郎らう顔かほも得あげずす。こゝと。御ご門もん外そとへと出いて行ゆく。始し終しんを聞き居ゐる重じやう太たう郎らう。ずんと立たつて二ふた腰こし抜ぬけ出し。由ゆ良らの之の助すけの前まへに置おき。只ただ今こん九く太た夫と様さまの詞ことばをつくくと思おもひ廻まわせば。重じやう々じやうの不ふ忠ちゆう者もの。と有あつて某それ追お腹はらを致いたしたり共ども。草くさばのかげにて亡ぼく君くんの。御ご心こころにも叶かなふまじ。所しよ詮せん武ぶ士しを立たてられねば。此この両りやう腰こしをお預あつけ申まう。此この後あと一ひとツの功こうを立たて。御ご所ところ存ぞんふ叶かなふ事こと仕しらば。元もとの武ぶ士しに御ご取とり立たて。偏ひとへに願ねがひ奉ほうると。頭かしらをさぐれば由ゆ良らの之の助すけ。熟じやく睡すいのどろく目め。成なる程ほど矢や間まろれよかろ。中なか々なか武ぶ士しの立たてられまい。いは憶おく病びやう腰こしぬけ侍ざむらい。二ふた腰こしマア似お合あぬく元もとの侍ざむらい。成なる迄まで由ゆ良らの之の助すけ御ご預あつり申まう。今いまり武ぶ士しでもあぬ其その方かた。家か中ちゆうへ顔かほも合あはれまい。何いづく國くにへ成なる共ども勝かち手てにれいきやれサア行ゆかれい重じやう太たう郎らう。早はやく出でて行ゆく。おいきやれと。おこり上じやう戸この怒いかり聲こゑ。矢や間まへ返かへす詞ことばもなくしほれ出るし便べんなり。九く太たう夫と顔かほを打うち守まもり。かゝるち家いへの一大いち事じ。由ゆ良らの之の助すけ殿どの御ご酒さけが過する。成なる程ほど御ご酒さけたべ申まうた。併しから殿どのが師し直ちやうを切き給たまはぬ其その中ちゆうが一大いち事じ。最も

早箇様に成からり。一大事からとるか過て。どうも後へは歸られぬと存ずるから。女共に酌さして御酒下さつたが。勿論酔は致さぬ。御評定承へらふ。慮外ながら急度承はる。されば聞るゝ通り御舍弟縫之助様は。石堂様へ御養子なれば別條なし。併し此方の屋敷は。即座に召上られしとの事。定て當城も明渡せど有御教書下らん。殿御存命の間。明渡せと御遺書あらば是非もなければ。左をければ此城を枕として討死。夫では主君の御無念も少しは晴ん。此評議一決せば。討死致す者共血判して。御用金を配分致さん。由良之助殿く。成程く承はつた。大事の評議に醉草臥てあらく眼。只今申は。討死致す家中分。金配分なされふとおつしやるのか。其義は此由良之助不得心。先討死と極て金銀は何よさるゝ。刃を取ては其身を忘るゝと。定九郎殿に御意見をおつしやつたぢやないか。生殘つて亡君の御帛を致す者が。金配分仕る筈拙者追腹討死の氣かつてござらぬ。いつ迄も生殘つて。金配分致したい。竹森喜多八進出。此城をのめくと明渡すは無念の至り。此小寺も。此早も討手を引受。矢種のあらん限り射て。討死を仕らん何れも。御同心の家中は血判く。チ、潔し然らば血判の上まで。金配分は此九太夫が斗とん。早の三左衛門是へく。其方金の役人なれば。御用金はいか程有るれ聞たし。ア、委細發らず帳面に記置。金高り廿万両。チ、九太夫が心積りも其通り。内三万兩は。奥方かほよ御前様御一生の御給料。又二万兩は。御舍弟縫之助様へ御かたみ分。千兩は石碑料。殘つて十四万九千兩と。帳面取寄。引合せ。金高相違なければ。内一万兩大星由良之助様御用金に相渡すと。帳面に記有は。由良之助殿く。チ、成程金の事承はつた。イナチ。此帳面よ記有一万兩は何の御用よ致された。ア、かてくへて金の吟味か。其金子は由良之助は。ア、何やら。チ、夫よ。普譜方間垣久

相摸入道千疋犬

作者 近松門左衛門

孟子梁の惠王に語つて曰。庖に肥たる肉有。野に餓卒あるは獸を引て人を食しむるの君。民いづくんど組せ
 ん刑罰を省き税斂を薄くし。仁政を施さは民すゝんで墜甲利兵をも碎つべしと云々。治乱の道の一筋も二つ
 にわかれて京鎌倉。北條九代の武臣前の相摸の守。平朝臣高時入道崇鑑おそ。ヲロシも。猛威四海をのびとかや。
 後醍醐の天皇第四の王子成良親王。十五歳にならせたまふを征夷將軍の號をかうふらしめ。鎌倉にすへおき
 て天下のゐるじと名斗に有かなさかにもてなし。其身は遊興くはんらくほしいまゝに奢侈を極め。天道をも
 恐れず人望にもそびさしかは。下方民の恨み上一人の逆鱗やすからず。此入道を亡すべしと。後醍醐の天皇
 笠置の岩屋におもらせ玉ひ。大塔の宮山門に旗をあげ楠正成。赤坂の城に櫓こもる由六波羅の注進。櫛のは
 を引といへども入道よど共仕玉はず。討手斗をさしのぼせ奇物を愛する余り。鬪犬をもてあそび大小名に相
 ふれ色々犬をあつめ。月に六日の犬合せ日餌には魚鳥の味をとゝのへ。金銀珠玉のくひたま綾錦を着たる
 犬。鎌倉中にあぶれてもたゞくべからず追ふべかふすと。旅人は下馬し農民は。鋤鎌すて、人も皆犬つくば
 ひどぞ成にける。すでに暮行。彌生の空。花の名残もどまらぬに。四季をわかたぬたのしみは。鬪犬にしく
 はなし臨時の犬合せを興行し。將軍の宮をなぐさむべしと御迎の使を立ければ。御座の間の御用人五大院の
 右衛門宗重。嫡子十郎宗房は御犬あづかりの物奉行。御前さらすの出頭いかめしげに立廻り。詞いかに伺公

の人々。今日は我君より將軍の宮の御振廻。御犬に對していつくよりも禮義あつく。作法みたされ候など我は貞にぞのめきける。將軍成長親王御心にそまねども。相摸入道にそむかじと青侍少々御供にて。御館に入せ玉ひける相摸入道座をもささず。對々にしとねをならべ扇をあげて。よくどくあれへくとまねかるれば。出仕の大名誰有て頭をさぐる人もなく。將軍無念の御かほばせ立わづらひてればします。中にもひさしの國の佳人安東左衛門入道聖秀。座を立て御前にひさまづきひたひを地につけ。恐れながく御座席の御案内ど。先に立てまねを上座に引なをせば。將軍時の御面目御座に。なをらせ玉ひける。五大院の左衛門いだけ高に成。詞ヤアびろうなり安東。君を始めたれあつてかまりぬ所。御邊一人して持立いやらまじ。尤將軍位たかしといへ共是はひつきやう餅のかた。今天下のあるは日本國の主君と云は我君相摸入道殿。主君をさしおき地に鼻つけて三拜は何事。將軍にさへ地に鼻付ば御犬への禮は頭を土へ堀おひか。惣じて關東の諸大名より犬献上せざるに。終に御ぶんがゑのゑる一疋さし上ず。御犬合せといへばいつとて不興顔。見ざるしきしさいづら君の御遊びが氣にいらぬか。此五大院親子が出頭して御犬をあつむるが氣にくはぬか。サア口がわらば御前で申せどひぢをはつてぞ申ける。安東ちつともまはがず。ラ、とはすども申さんと思ふ所。ねよを下人ひくはんをもてなすにも。客ぶりていしゆぶりと云事は生有もの役。鎌倉殿より將軍の宮を御招待能出て請じ奉るは是御奉公ならずや。もとより犬の御遊氣にくはねは御邊がどりさばき猶もつて氣にいらす。君は四海を手ににぎり六十餘州の武士の司。御遊びとならば空かけ犬追せめ馬などこそあるべきに。舞馬鬪鶏に國をうしなひし亂國の端。不吉とや申さん無道とや申すべき。われらが目には墓原に死骸をあ

前號葉數五六とせしは二一の誤

らろふごとく御遊とは見へ申さず。國土のついで諸人のくるしみ。拘斂人の食をくらへ共制することあたはずと云。聖人の詞あたれる哉。都合合戦眞最中軍兵の御おれならば。此安東も手勢五百や七百は只今でも承くらん。犬をもたねばよしあしは。猶しらず。詞邊又犬の目利犬はくらう。武士の本意はしるまじと詞をとなつて申さるゝ。武士の本意しつたかしらぬか心見よと。大刀つかに手をかくる大將驚きうれどとめよ。兩方しづまれしどしきつて制し押しづめ。宗重は身をすてし生命をれもんじ。安東は道を守つていさめを納るゝ兩人兩輪の忠しん。必遺根有べからず。詞誠や安東には男子なく娘一人有と聞。禪門が仲人せん宗重が一子。あの十郎宗房にめあはせ。一家のちまみ頼み入今日より十郎に。三万町を加増し禪門が子分とすべし。然れば娘は相摸入道が嫁なるが。是に不足はよもあるまじとのたまへは。安東は心底に大愆不忠のへつらひ侍。縁を結ぶは心外ながら天下の主の嫁成と。のつひきさせんぐめんの上意。心にそまぬ有がたさあつとお請を申さるゝ。詞かゝる所に六波羅のはや打衣摺の助房。鎧の袖をかせよひたし御白洲につしんで。詞扱も笠置の軍味方御理運。城を一時に攻落し天皇は落失たまひ。大塔の宮尊雲親王追手の櫓にて御腹召れ候を。則御首打落し實掬入候と。御前も指上大息ついたる其有様。大將をはじめ列座の諸將。當家の運は萬々歳を悦びとよみたまひけり。將軍御無念肝にてつし飛かゝつて入道と。指しがへんどおぼせしが押しづめて打しほれ。天皇は我御父大塔の宮は我兄なれども。淺ましき御心や候。詞今天下安全に治る事皆入道殿の仁徳。政道たゞ敷故成に及ぬ御謀叛道にむき。十善の位を去り刃に命をおとし。天のせめを請玉ふ。我是を余所見んも世のろしりのかれがたし。高野山よのぼり出家して大塔の宮の御ぼだい。父天

相模入道千疋犬

皇のざいごうを。めつしたふ候と誠しやかにの玉へば。詞入道笑つてひざ立なをし。年ももたらでうまく
 と此禪門をたらさんとや。別心なくばたすけおかんと思ひしに底のしれぬ性念か。高野にのぼり出家する
 とて鎌倉をのがれ出。軍勢を催し我に敵せん魂鼻の先は顯はれたり。高野までもあく近邊に能山あり。いか
 に宗童桐か谷の林の奥は押あめ。きびしく番をつとむべし早くくとひつ立させ。上方の軍味方勝利。町人
 百性三日三夜酒宴してよろこべど。鎌倉町々相ふれよと籠中に入たまふ。賑ふ民の鎌倉山。あすのあらしは
 しらねどもけふの花とぞ。三重さかへける花は彌生よ。娘は十九二十まで賀わらみせしひとり姫。父の安東
 てうあいよ名を繪合と付たるも。空蟬夕顔わかむらさき明石の君に押つとぎ。ならびなしどの心かや。今度
 上意を以て權付の祝言。父が心にろまぬ上姫もはつとたどろきて。しやくのかたまり胸先に氣をふさきたる
 氣やまひを。先養生のためにとて箱根の湯本は湯治あり。腰元はした五六人侍は里見義助。としわかなれ
 其才覺もの。のり物の先はいくく。りつばに手をふる男あり。簾かゝげて姫君も。腰元しゆもめをはな
 さす迎も持ならあよる男。ほし月夜もぞ着たまふ。何ぞかしけん姫君。ア、又めまひが來た。まてよくとの
 たまふ聲。うれしくお興立ませと。腰元立寄額をおさへ興よりおろし參らすれば。轆轤かち衆しいくどは
 るか木蔭にかくれける。女房達聲々に。詞是義助どの。外の衆はともあれ。こなたはつねぐおろはちかふ
 も召るゝ身が。此御氣色を見捨急な御用も有もの。外様衆とおなじ様。御前よけるは何事といはれて義助
 急度つくばひ。詞いや只今まではこれへや住。御祝言極りて當代誰あらん。五大院の十郎宗房公の御前様。ぬ
 しある花とま花のおろばへ立寄は。鶯などのきやしやあ鳥。詞拙者式は鳥の中にも春の花にきらはれ。夏山

よほへまはる。名さへほとゝ義助なればねんりよいたすといひけれり。女房達うちわらひ 詞、姫君さまの御祝言。ほうかいりんきかこりやおかしい。りよ外あこといはず其是。お あげるすいぶんきれいな水一つ。それお乗物にお茶わんある。あいとこたへてどり出す袋の紐のあがき世を。結びしめたる互の戀。素い夫婦となれ染付の。詞ハア、是腰元しゆ。詞此お茶わんはひゞきが有。聲どのはりんきふかいげる。せんざくあるは定のもの。大事の嫁入御察わしがわつたも御意をされな。ことわつておいたぞと姫をしりめにねめ付て。茶わんのよしき波のあや星月夜の淺井の水汲あげ御せんにまへらす。姫君茶わん手にもとらず顔つくつく打ながめ。詞な何やらざすくあてことじやの。祝言とやら嫁入とやらすきこのむと思ふてか。此おなかのつかへを見や。さかやきろつて大小さいたいとしひつかへか胸さきに。なづんでものを思はする。此水も先下において。うろかまことかこれ見やと。襟から手よ手をおところへじつと引入引しめて。それろのつかへむつくりとたかい手あさるか。其茶わんのひびきは誰か入た覺があらふ。われてぞ末に石うるしひなればせまいどのたまへは。女房達は氣をうばれ。まちどは男にことかけちやわんひゞきいれる物もない。ア、見るめもしんきを皆こちよりやと。氣をあげ氣をもみちやわんと茶わん。身をすりぬかのぬかばたらき憐なり「うらやむばかりなりかゝる所に御靈の宮の方より中大名とおぼしきが。御しるし押たてうつて来る。あれば御用の役人とおほへたり。出あふてはむつかしとまづ乗物にのせまへらせ。女房達も乗物かく轆尺は手をふるやら。あはてふためき行所。金柱の四方輿しんくのふさつき五色のふとん。狐またらの犬をのせおちち足輕いかつてゑ。詞こりやくお犬のお通り。乗物すへて下馬いたせ。おりぬかく。おりずはういつ乗物

ふちわり引ずり出せとどつとよる。義助飛より二三人かいつかみ取てまげ。詞らうせき千万身が主人は女申なれば。貴人高家に参りあふても乗打御免。まんぞちく生に下馬とは此男が供するからと。天地がどんぼがへりするともいかあ〜思ひもよらず。おてしまかれと云所に犬奉行齋藤文治とし行聲をかけ詞ヤア〜うぬはたが家來でりくつばる。恭くも上意によつて我々さへ。かちはだしにて御犬のれともする。是が眼にかゝらぬか。二言とはかはもと首ぶちは多す合点かときめつくる。イヤサ首打るゝが悲しいとて畜生に下馬罷ならぬ。犬奉行の刀あどで聊示に人の首おとさるゝ物でもなし。物はためしサアおとさるゝかおとしてみよと。兩足ぐつとふみのばし兩手をくんで立たりけり。お犬にりよ外のくせものは討捨との上意。それのがすまどひしめけは繪合のりものまるびあり。詞御尤〜あのものゝ存せぬこと。みづからが乗物ありあれいたす上からい。いざお通りと土に手をつきたまふを見て。義助は無念の齒を喰しぱり。胸をさすつてひかへたり。詞オ、よいがてん。是は此比の犬合に疵をうけたる病犬。養生の爲め暫く〜にてやすむる。其間は往來の人どめ。太義ながらおまちやれと。貴人高位をうやまふごとく法に過てぞ見へよける。父の安東鶴が岡の下かう道。かくとぎくよりよこぎれ又はしり付。娘繪合が腰のつがひと〜とふみ付。むかふへがはどけたをしそつくと立て。詞此聖秀が一生に人間はいふに及ず。一さいのものすねにかけしことなけれど。ちくるいに頭をさげたるやつ。手がけがるればすねでけるより外はなし。安東入道聖秀が娘をどか。犬も下馬してのめ〜と宿所へかへらんと思ふか。七生までの勘當まかりたてとねめつくる。姫は涙にふししづみわれとても無念にはぞんせしが。のりうちすれば家來までたすけぬと。きびしきとがめに前後を忘れし不調法

勘當は御免あれ。其換み手に懸て殺してたべ父上と。絶付は。又蹴散し。はつたと睨。已今迄の身と思ふかや。君の御仲人をにて。五大院の右衛門宗重の嫡子。十郎宗房に縁組仰付られ。殊に宗房を鎌倉殿の子分に成れ。安東が娘は入道が嫁なりとの上意。なんぼう有がたく存せしに諸人の見る前。六番類下座をして。天下取の嫁に成べきか。五大院殿とは縁切たり。エ、大事の夫を持てるまひ。親も身に過た。大事の聲を取損ふ。言語同断の女め。娘で無。親で無。生別の勘當。ヤイ義助。己が在所は上野の國新田と聞。武士の名所なれば生國も香ばしく。心ばせに見所在て。姫に付置甲斐も無。五大院殿へ云譯まし。暇を呉た立てうせろと。急にせきたる顔色に。頭をうな垂腰屈めすくとして立出る。繪合も義を思ふ親の詞のはしく心に有との聞分ても勘當との一言が。耳丹も身にもしみくど。かきくれ哀おはせしが。ノウ嫁入は元より好ぬ事。男子の勘當を余所に聞さへ悲き。况て女の我身の上。勘當受て何んとせん。母様の今はの時。繪合か事と爺親が。預た受取た。心やすふ往生あれと。死に行人に御契約。母様は嬉げ又夫さへ聞ば成佛と。笑ふて臨終成れし事。よもや忘れと成れまい。勘當程の憎みは身は於て覺へなし。去迎は許してたべ。供の者共情無。詫言して呉ぬかど。土にかつばと。ひれ伏て。聲も惜ず泣給ふ。父もろくく涙にて。やれ母が契約忘はせぬ是非勘當を受まいなれば。父が切腹する迄と。太刀のつかに手を懸る。ア、是なふ。勘當受ませう。未來迄も勘當して自害を止つて下されと。絶付。ム、然らば只今よりは。親でなく子でなきが合点か。如何もく親でなければ。自も娘で無。然らば他人。其所立去。うろたへて長居せば。此刀此腹へ衝込。サア何と押し退られ。あいと泣出す目も暮て。親の名残の悲きに未來を懸し夫の行衛。心一つを跡先も急ぎ兼止

め兼。先を見送り跡見返り。聲の限を泣別れ。供の侍下部まで。御側しと泣叫ぶ。目も當られぬ次第也。父も急來る涙を包。是々齋藤文治。五大院の右衛門。此方より使者を以て申あ及ず。御邊則。犬奉行。元犬より事起。娘勘當致す上は縁組。ふつと切たる由。屹度相達し給るべし。エ、恨めし此犬故大事の聲を取損ひ。近頃残念くど。口には云て心には。犬同前の俊臣に維る縁の首環を。我身も脱て犬懸。義を守れる丈夫の信の「道ころゆ、しけれ。齋藤文治跡見送り。聞れたるか旁。扱偏窟成古流者。諂で立當世犬を拜禮して成共。立身するこそ利發者。誰褒もせぬ義を立て身の損知らぬ大痴と。一度よどつとぞ笑いける。斯所に編笠眉深し引蒙たる若者。間近く寄て笠かなぐり。拙者は以前御覽の如く。安東左衛門入道聖秀が家來犬について主人も扶持を離され。少切米の奉公人。身上の敵を取らはと諸親類の存る所。尤世間も立たし。然共鐵の柄をも握る者。犬を相手には仕らず。差向相手は相模入道殿。随つては御出頭犬の預り五大院の右衛門。是に恨を散する迄は事延引。先夫迄の手合せと。云より早く拔打に犬の胸中真二つにぞ切たりける。スワ狼籍者。ろれ逃すあ。小疵を付て叩伏搦取と。云儘に。文治は二間柄の十文字。刀を巻てはね落さんど。上下又振て掛所を。發矢と彈つてと人。しるし付の金物より。はずはに掛てぞ切折けり。若黨。足輕。中間。犬引。拔連く討て懸る。真中に割入面も振ず。三重切まくり。刀の刃は。さいらと成。物打拆て失ければ。からりと棄。大脇指まつかうに差簪暫時が間に十七八手負八人切出たり。文治は苛て死に狂に味方損すな。御屋敷へ注進し。加勢を請て搦むべし。其間は礫を以て待遇。遠攻せよと。草を引。砂を攪投掛れば。見向もせず。星月夜の水に口を濡し貌の血洗。刀を倒手も振注。乘る切先踏直し相手欲氣も鬚搔

投掛れば。見向もせず。星月夜の水に口を濡し貌の血洗。刀を倒手よ振注。乗る切先踏直し相手欲氣よ鬚搔

大阪經濟雜誌

毎月三回
壹の日發兌

壹部定價六錢○郵稅五厘○六部前金三十五錢○十二部前金六十五錢送金は郵稅小爲晉郵券代用は五厘切手にて壹割増

創刊日尙淺しと雖も聲價四方に貴く發兌の誌數大に加はる今回第十二號の發刊を機とし大擴張をなし從來の

面目を一 ● 論說寄書 是雄大精新せり ● 紀傳 是實業家の實踐を記し ● 實業

浴革 是各種事業の起原經歷を悉くし ● 紀傳 是實業家の實踐を記し ● 實業

新事業 是有らゆる專賣特許の構造製法を審よし ● 經濟世

界 是商工業の消息を通せり ● 時事 是奇妙なる政事上社會上の批判 ●

鉄筆 是銳利劍の如し ● 雜錄 あり ● 統計 あり

方今無數の雜誌中に於て實益と趣味とを兼備するものは大坂經濟雜誌を措て他あらんや

大坂瓦町五丁目

發行所

大坂經濟雜誌社

國文雜誌 靜岡文學

毎月二十五日發行
定價貳錢 郵稅五厘
第一號は八月二十五日既發

大方の雅客文士は
あはれ購讀して見
玉へ

靜岡縣靜岡市大鋸町

月 日

靜岡國語傳習會

弊舖の寫眞は可成鮮明を主とし年を経るも變色なく且可成廉價を主とし貴需に應じ約束の期限と履行可仕間何卒御來車被下度願上候
五名家の寫眞私方に在之候

上野廣小路鳥八十の隣

吉川寫眞師

少年
雜誌

海國子

第五號已刊

定價一冊二錢○六冊十一錢五厘
十二冊二十一錢

郵稅每冊五厘○郵券代用は五厘郵券にて一割増のと

今や館運日に隆盛よ起き本誌よりは一大改善を施せり紙數常々五十二頁以上とは田舎雜誌に似合はぬ廉價の雜誌本紙の特色既に公評のあるあり今更喋々を要せず。

材

演說
著作
談話

發行所

兵庫縣揖西
郡龍野町

育英館

定價一冊貳錢五厘●六冊十四錢●十二冊廿五錢●郵券代用は五厘二錢券にて一割増
第一号は十月八日發行
材料 何物て材料るれ自ら冠する如く演說著作談話の材料を供するにあり●材料は海の内外を問はず時の古今を問はず賢哲名士の著書に就き其粹を抜き其華を摘み錦展珠轉の文辭文壇の好材學海の珠玉社會の珍事奇聞細大網羅して殘す所なし是れぞ材料の本色なり特色あり苟も文人論客交際家を以て自ら任ずるものは必讀の雜誌なり●

社告

告社!!!

告社

●本誌の前金相切れ候時は發送の節帶封に朱書致候間御覽の上は速に御拂込被下度候尙御沙汰るき時は發送の儀見合申候此段前以て申上置候也

●本誌は凡て前金に候へは御注文のみよては發送せず
●本誌定價 一冊三錢五厘 (半ヶ年前金貳拾錢)
(一ヶ年前分三拾八錢) 前金の分は本社へ地方は一冊に付郵送費五厘申受く

●席告料 (五號活字) 一回四錢 十行以上一割引回数數並に義太夫謠曲に關する者も限り尙割引あり
●代金爲替半圓以下は郵便切手にても宜敷以上は神田郵便電信支局振込 (東京市神田區紺屋町四拾四番地義太夫雜誌社)宛御認被下度候

●投書規則 投書は凡て到着の順序 以て掲載するも未完稿は之を採らず○批評等にして類似の者ある時は其優れたる者を掲載す○次號又讓し投書にして其事柄の既陳腐と認むる時之を省く○誌上は匿名なるも投書し住所姓名なき者は掲載せず○投書は眞書にて廿四字詰とし判明と認め義太夫雜誌社編輯局宛て送るべし○投書は返却せず○問合せは往復はがきか又は郵便封入の事

明治廿六年九月廿九日印刷
全 年九月三十日發行

東京市神田區紺屋町四十四番地 發行兼編輯人岡田 廉二
全 市牛込區天神町二十五番地 印刷 人鶴 見 應

發行所

東京市神田區紺屋町四十四番地

義太夫雜誌社

(明治廿六年) 逓信省認可
三月六日

印刷所

東京市日本橋區南茅場町四十八番地

明 具 舍